

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その27）

～「子どもの心に火をつける」～

2021年3月吉日

U12部会広島地区

SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また、この3月で選手が卒業される保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。

そしてこれまでのU12部会広島地区へのご支援・ご協力に対しまして、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

先月2月20日からスタートした6年生大会、そして例年よりずいぶん時期が遅れた5年生大会ですが、多くの方の努力により無事終えることができ、改めてバスケットボールができることの有難さを考えさせられました。

このコロナ禍の中、ミニバスケットボールを愛する子どもたちのために、いろいろな面からご理解・ご協力をいただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

私事ですが、またまたやってしまいました。ルールを知らないということが、どれだけ選手や周りの方々に迷惑をかけることか、改めて反省しました。

6年生大会の試合中のことです。相手ボールのスローインにもかかわらず、私が選手の一人をベンチの近くに呼び、指示を与えました。それを見られた審判が「自チームがディフェンスの時は、ベンチへ呼んでの指示は出せません」と教えてくださいました。

なるほど、マンツーマンディフェンスを推進している中で、ディフェンスの一人が抜けると、スローインからの再開ができませんよね。

相手チームにも大変な迷惑をかけしたことをお詫びすると同時に、また一つ、コーチングの大切さを教えてくださった審判の方に感謝です。

さて、ある教育学者の言葉に、次のようなものがあります。

「平凡な教師は言って聞かせる。よい教師は説明する。優秀な教師は率先垂範する。最高の教師は子どもの心に火をつける。」

この「教師」という言葉を「コーチ」に置き換えてみます。

「平凡なコーチは言って聞かせる。よいコーチは説明する。優秀なコーチは率先垂範する。最高のコーチは選手の心に火をつける。」

私自身、この言葉に妙に納得しました。そして大いに反省しました。

練習や試合における自分自身のコーチングを振り返ると、多少の説明はあるものの、言って聞かせることが何と多いことか。過去の経験を振りかざしながら理詰め子どもたちをコーチしている自分の姿が浮かび上がりました。

そうではなく、いろいろな技術を言葉で伝えるとともに、目の前で見せてやりながら教えることは、特に小学生には必要なのでしょうね。

とは言え、高齢の私としては手本を示すほど体が動かないので、指導の限界すら感じてしまいます。(ちょっとジャンプシュートをただけで足首をひねったり、足のふくらはぎがつったり。また先日はギックリ腰になり、数日間動けず、5年生大会のコーチは突っ立ったまま行いました。本当になさけない限りです・・・ 笑い)

さて、そこで大切になるのが、最後の「**子どもの心に火をつける**」指導なのでしょう。

以下は、その教育学者が教師について書いたものですが、「教師」を「コーチ」に置き換え、「授業」を「練習」に置き換えてみました。

ほとんどのチームが、6年生が卒業した後、新チームでのスタートになります。4月になると、新しいメンバーが加入するかもしれません。

また、今のチームを継続して指導するコーチもいれば、初めてコーチをされる方がいるかもしれません。保護者の役員も新しくなれることでしょう。

いずれにせよ今回のコラムが、指導者として、また保護者として少しでも参考になれば幸いです。

子ども一人一人の「やる気ポイント」は異なります。そのためコーチはそれぞれの子どもの合ったポイントを見つけ出し、そこを刺激していきます。

それがコーチとしての最高の仕事なのです。

しかし、子どもの心に火をつける前に、まずは、コーチ自身が常に志高く燃えプラスの発信をし続けなければならないでしょう。その上で、子どもの良いところを見つけ、そこを引き出すように努めるのです。

自分の「やる気スイッチ」が入っていないくて、どうして子どもにスイッチを入れることができるのでしょうか。子どものために思い、子どもの良さを見出そうとする中で、そのポイントも見えてくるはずです。

子どもの不出来なポイントばかり指摘し、「だめだ!!」と叱れば叱るほど本気になっていない自分と、子どものためではなく、自分のために練習や試合に協力させようとしている姿が浮き彫りになってきます。

コーチにとって大切なことは、子供の成長のために、バスケットボールというスポーツを通して、子どもの心に火をつけていくということです。

仮に子どもを叱る時があっても、決して感情的にならず、子どもの成長を心底願って語りかけることです。否定的な指導を繰り返しているコーチを前にして、どうして子どもたちの心に火がつくのでしょうか。

本気で子どものことを思って指導しようとするなら、その前に「楽しい」とか「できた」とか「分かった」という喜びのある練習、「感動や発見」のある練習づくりに励むことが重要でしょう。

その中で子どもたちも、「もっとできるようになりたい」「もっとシュートを入れたい」「もっとディフェンスをがんばりたい」と思うようになるのでしょう。